

ルカの福音書 62回

人の子の来臨

ルカ 12 : 35～48

1. はじめに

(1) 文脈の確認

- ①ルカは、エルサレムへの旅という枠組みの中に、種々の教えを配置している。
- ②パリサイ人や律法学者によるイエスの拒否が、決定的になった。
- ③拒否という現実の中で、弟子としていかに生きるべきかが教えられる。
- ④クリスチャンは、霊的戦いに巻き込まれているのである。

(2) ルカ 12 : 1～13 : 17 の内容

- ①恐れなき信仰告白 (12 : 1～12)
- ②永遠の視点 (12 : 13～21)
- ③神の備え (12 : 22～34)
- ④人の子の来臨 (12 : 35～48)
- ⑤苦難の日の予告 (12 : 49～59)
- ⑥悔い改めの勧め (13 : 1～9)
- ⑦教えの正しさを証明するしるし (13 : 10～17)

(3) 注目すべき点

- ①7つのポイントは、拒否の現実の中でいかに生きるべきかを教えたものである。
- ②前回の箇所（神の備え）
 - *神の備えがあるので、思い煩ってはならない。
- ③思い煩いから自由になると、怠惰な生活に入る危険性がある。
- ③そこで、来臨に備える重要性を教えるために、2つのたとえ話が語られる。

2. アウトライン

- (1) 忠実なしもべのたとえ話 (35～40 節)
- (2) 2種類のしもべのたとえ話 (41～48 節)

3. 結論

- (1) 再臨の約束
- (2) メシア的王国（千年王国）の約束
- (3) 忠実なしもべの使命

人の子の来臨に備えることの重要性について学ぶ。

I. 忠実なしもべのたとえ話（35～40節）

1. 35節

Luk 12:35 腰に帯を締め、明かりをともしていなさい。

- (1) 思い煩いから解放されたなら、いかに生きるべきか。
 - ①常に、人の子の来臨を待ち望みながら生きる。
 - ②「腰に帯を締め」とは、奉仕の準備ができていることである。
 - *長い上着を帯で締めて短くすると、動きやすくなる。
 - ③「明かりをともしている」とは、闇を消す働き（働き）の準備ができていることである。
 - *常に、みことばを語る準備ができている。
 - *常に、証しをする準備ができている。

2. 36節

Luk 12:36 主人が婚礼から帰って来て戸をたたいたら、すぐに戸を開けようと、その帰りを待っている人たちのようでありなさい。

- (1) ここから、忠実なしもべのたとえ話が始まる。
 - ①主人とは、主イエスである。
 - ②しもべとは、弟子である。
 - ③「婚礼から帰って来て」ということばに過剰な意味を与える必要はない。
 - ④「戸をたたいたら」ということばは、比喩のことばである。
 - ⑤ポイントは、主人を迎える準備ができているということである。
- (2) このたとえ話は誰に適用されるか。
 - ①イエスが昇天して以降の初代教会の弟子たち
 - ②携挙を待ち望む教会時代の弟子たち
 - ③再臨を待ち望む患難期の弟子たち

3. 37～38節

Luk 12:37 帰って来た主人に、目を覚ましているのを見てもらえるしもべたちは幸いです。まことに、あなたがたに言います。主人のほう（ほう）が帯を締め、そのしもべたちを食卓に着かせ、そばに来て給仕してくれます。

Luk 12:38 主人が真夜中に帰って来ても、夜明けに帰って来ても、そのようにしているのを見てもらえるなら、そのしもべたちは幸いです。

- (1) 主人は、目を覚まして待っているしもべたちを見て感動する。

- ①ルカは、「まことに、あなたがたに言います」という表現を使っている。
- ②ルカ4:24にも出ていた。

Luk 4:24 **そしてこう言われた。「まことに、あなたがたに言います。預言者はだれも、自分の郷里では歓迎されません。」**

- ③この表現は、次に語られる約束が確かであることを強調している。

(2) その約束とは、主人としもべの役割が逆転するということである。

- ①イエス時代には、主人がしもべに給仕することはあり得なかった。
- ②そのあり得ない逆転が起こる。
- ③初臨のときに低くなられた神の子が、来臨のときに再び低くなられる。

(3) **ユダヤ的時刻による真夜中と夜明け**

- ①真夜中は、「the second watch」(第2見張り時)である。

*午後9時から午前0時

- ②夜明けは、「the third watch」(第3見張り時)である。

*午前0時から午前3時

- ③人が眠る時間帯でも、このしもべたちには、主人を迎える準備ができています。

4. 39~40節

Luk 12:39 **このことを知っておきなさい。もしも家の主人が、泥棒の来る時間を知っていたら、自分の家に押し入るのを許さないでしょう。**

Luk 12:40 **あなたがたも用心していなさい。人の子は、思いがけない時に来るのです。」**

(1) ここで、別のたとえ話が挿入される。

- ①ここでは、人の子の来臨が「泥棒の出現」にたとえられている。
- ②強調点は、予期せぬ時に人の子が来臨するという点である。
- ③忠実なしもべのたとえ話は、弟子たちへの励ましであった。
- ④泥棒のたとえ話は、弟子たちへの警告である。

(2) 「あなたがたも用心していなさい」が、泥棒のたとえ話の適用である。

- ①人の子は、思いがけない時に来る。
- ②それゆえ、常に用心している必要がある。
- ③マタ 24:36

Mat 24:36 **ただし、その日、その時がいつなのかは、だれも知りません。天の御使いたちも子も知りません。ただ父だけが知っておられます。**

II. 2種類のしもべのたとえ話（41～48節）

1. 41節

Luk 12:41 そこで、ペテロが言った。「主よ。このたとえを話されたのは私たちのためですか、皆のためですか。」

- (1) ペテロは、このたとえ話が誰に語られたものなのか、質問した。
 - ①「このたとえ話」とは、「忠実なしもべのたとえ話」である。
 - ②これは、弟子たちのためなのか、群衆のためなのか。
 - ③主人に給仕してもらえるしもべは、自分たちだけなのか、群衆も含むのか。
 - ④ペテロは、天的祝福に目が開かれつつある。
 - ⑤この質問がより重要なたとえ話を引き出す。

2. 42節

Luk 12:42 主は言われた。「では、主人によって、その家の召使いたちの上に任命され、食事時には彼らに決められた分を与える、忠実で賢い管理人とは、いったいどれでしょうか。」

- (1) イエスは、ペテロの質問には直接答えていない。
 - ①イエスの教えは続いているのである。
 - ②これ以降の教えは、ペテロが質問したこと以上の答えになっている。
- (2) イエスは、当時のイスラエルの指導者層を念頭において語る。
 - ①忠実なしもべと不忠実なしもべが受ける報酬は、異なる。
 - * 忠実なしもべとは、イエスの弟子たちである。
 - * 不忠実なしもべとは、パリサイ人や律法学者たちである。
 - ②主人は、忠実なしもべに大きな権限を与える。
 - * 彼は、召使いたちの上に任命される。
 - * 彼は、他の召使いに決められた分量の食事を与える。

3. 43～44節

Luk 12:43 主人が帰って来たときに、そのようにしているのを見てもらえるしもべは幸いです。

Luk 12:44 まことに、あなたがたに言います。主人はその人に自分の全財産を任せようになります。

- (1) 主人がいない間も忠実に奉仕をしたしもべは、幸いです。
 - ①主人は、そのしもべに報賞を与える。
- (2) 「まことに、あなたがたに言います」

- ①主人は、忠実で賢い管理人(しもべ)に自分の全財産を任せるようになる。
- ②これは、より大きな権限を与えるという意味である。
- ③これは、御国(千年王国)で成就する祝福である。

4. 45～46節

Luk 12:45 もし、そのしもべが心の中で、『主人の帰りは遅くなる』と思い、男女の召使いたちを打ちたたき、食べたり飲んだり、酒に酔ったりし始めるなら、

Luk 12:46 そのしもべの主人は、予期していない日、思いがけない時に帰って来て、彼を厳しく罰し、不忠実な者たちと同じ報いを与えます。

- (1) 不忠実なしもべは、不信者である。
 - ①しもべであるかのように振る舞っているが、彼は救われていない。
 - ②彼は、召使いたちに食事を与える代わりに、彼らを打ちたたく。
 - ③また、自己中心的に振る舞う(食べたり飲んだり、酒に酔ったりし始める)。
 - ④これは、パリサイ人と律法学者の姿である。
- (2) 主人は、予期していない日、思いがけない時に帰って来る。
 - ①主人は、不忠実なしもべを厳しく罰する。
 - ②彼は、他の不忠実な者たちと同じ扱いを受ける。

5. 47～48節

Luk 12:47 主人の思いを知りながら用意もせず、その思いどおりに働きもしなかったしもべは、むちでひどく打たれます。

Luk 12:48 しかし、主人の思いを知らずにいて、むち打たれるに値することをしたしもべは、少ししか打たれません。多く与えられた者はみな、多くを求められ、多く任された者は、さらに多くを要求されます。

- (1) ここでは、奉仕に対する報賞には、段階があるという原則が教えられている。
 - ①信者の場合は、天において受ける報賞に段階がある。
 - ②不信者の場合は、地獄において受ける罰に段階がある。
- (2) 御心を知りながら、それを無視したしもべは、むちでひどく打たれる。
 - ①御心を知らなかった者は、少ししか打たれない。
- (3) 「多く与えられた者はみな、多くを求められ、多く任された者は、さらに多くを要求されます」(48節)。
 - ①これが、聖書的弟子道の原則である。

②ヤコ3:1

Jas 3:1 私の兄弟たち、多くの人が教師になってはいけません。あなたがたが知っているように、私たち教師は、より厳しいさばきを受けます。

③しかし、御心をより深く知ることを恐れてはならない。

④むしろ、より深く御心を知り、より忠実に歩むことを志すべきである。

結論

1. 再臨の約束

(1) ルカでは、弟子たちのもとを去り、再び戻って来るという予告は、ここが最初。

(2) マタ 24~25 章

(3) ヨハ 14:1~3

Joh 14:1 「あなたがたは心を騒がせてはなりません。神を信じ、またわたしを信じなさい。

Joh 14:2 わたしの父の家には住む所がたくさんあります。そうでなかったら、あなたがたのために場所を用意しに行く、と言ったでしょうか。

Joh 14:3 わたしが行って、あなたがたに場所を用意したら、また来て、あなたがたをわたしのもとに迎えます。わたしがいるところに、あなたがたもいるようにするためです。

2. メシア的王国(千年王国)の約束

(1) ギリシア人にとっては、神の国とは理想化された霊的王国である。

(2) ユダヤ人にとっては、神の国とは地上に成就する終末的王国である。

(3) 旧約時代の預言者たちは、メシアの到来と神の国の設立を預言した。

(4) 2つのたとえ話は、再臨と神の国の設立を前提に解釈する必要がある。

3. 忠実なしもべの使命

(1) 2ペテ 3:9

2Pe 3:9 主は、ある人たちが遅れていると思っているように、約束したことを遅らせているのではなく、あなたがたに対して忍耐しておられるのです。だれも滅びることがなく、すべての人が悔い改めに進むことを望んでおられるのです。

(2) 「主の日」(終末の出来事)は、遅れているわけではない。

(3) 1人でも多くの人が救われるように、神は忍耐しておられる。

(4) クリスチャンのゴールは、思い煩いのない生活ではない。

(5) 携挙、再臨、千年王国という終末時代の出来事を理解したなら、生活は変わる。